

太 棹



第九拾九號

加藤虎之助
しげき画

東京 太 棹 社 發 行

胃腸にミカラチ

東京市日本橋區通二ノ五

新潮製藥株式會社

電話日本橋三八二番
標榜東京七〇一〇八番

空氣がよくて

閑靜なアパート

(省線蒲田驛下車松芳雜貨店より左へ入る)

蒲田區御園町二ノ一四

シルヴァハウス

電話蒲田三六二一番

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八

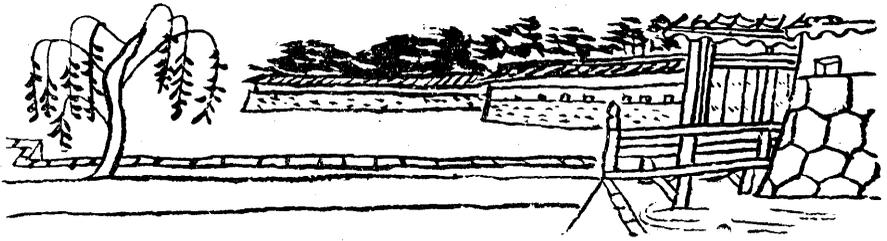
電銀二〇八

あしりの日の豊澤松太郎師



豊澤松太郎略歴

師は大阪に生れ、九歳にして濱右衛門に手ほどきをうけ、後五世豊澤廣助並に初代豊澤團平に師事して、十八歳既に立三味線に昇進。三十三歳の時竹本組太夫を弾いて初上京歸阪後彦六座に出勤。四十一歳竹本朝太夫の三味線で再び上京、以來東京に落つき、七十二歳の時朝太夫と組んで三十年振りに歸阪、文樂座に出勤する事三年、歸京したのは七十五歳の時である。



太 棹 第九拾九號目次

文樂座若手一座	齋藤拳三 (二)
浄曲の助六	樂々翁 (五)
『のろま』なる語に對する空想	中山徳太郎 (六)
ラヂオ浄曲漫評	金丸 (八)
佐渡の秋	芳河士 (三)
津太夫今後の語り物に就て	齋藤拳三 (四)
佐渡の旬會	芳生 (六)
増補浄瑠璃に就て	宮澤淡々子 (八)
讀者の領分	的野關路好 (二)
太棹社彙報	森三好 (三)
東都五十義會成績表	森三好 (三)
會報	森三好 (三)
編輯後記	芳河士 (三)
口繪	ありし日の豊澤松太郎師 (三)
表紙・カット	宮尾しげを (三)



文樂若手一座

齋藤拳三

七月に東上したばかりの文樂が、九月に再び上京しやうと
は夢にも思はなかつた。

が我々人形芝居好きには、誠に結構である。特に大隅を中
心とする若手の一座は今まで番附で見ただけである。十年後
の淨瑠璃界を負つて建つ人達、常には輕い所ばかり語つて
人達が大物をどう立派に語りこなすか、興味深い一種の試験
問題である。

然し、實際に聽いて見ると一寸寂しい氣がする、大隅太夫
以外は一寸弱點を曝露した人の方が多かつた。何としても我
々には津、土佐、古靱と云ふ存在は大きい。此の三人だとオ
クリから聽かないでは氣が濟まないもので、飯をかみく座席
へ大急ぎで戻つてくる事が多いが、今度など食後一寸一服つ
ける、少し色氣の無い云ひ方をすると、おさらり氣分である。
古靱太夫の太十、土佐太夫の酒屋だと、榮三の光秀、文五郎が
のお園を犠牲にしても聽くが、此の一座だと榮三、文五郎が
仲々大きい存在になつて来る。糸もあの顔振れだと道八一人

が光つて来る。

九月下旬と云ふ好期節の上京は大賛成だが、今度の尻つば
ねの大入りを喜びながらも、此の規畫の度々でない事を私は
望んで置く。

せめて太夫で鏝、駒、文字、糸で新左衛門、吉彌、仙糸位
は入れて欲しい。

第一回

今度の中心をなしてゐる大隅太夫、和泉太夫が大切りの三勇
士名譽の肉弾に、旅團長と中隊長で一寸出るだけなのは馬鹿
々々しい。

私の見物の日は大隅太夫、廣助の總見の日だつた。此の日
は特に大隅最負不觀劇日と看板を出す可き日である。然もあ
の肉弾三勇士は、前幕に一段みつしり語つた太夫が出てこそ
興が有る。あの行進ラツ、パも法善寺を弾いた猿糸の友次郎、伊
達太夫を弾いた猿二郎の仙糸が並んでこそ興が有る。

八陣の人形は失敗で有る。いゝのは天主閣を四人で見送る幕切れだけで、有名な毒酒の笑に船を廻さないのも悪いし、天主閣の道具變りを繼なぐ後藤又兵衛の六法を玉藏が演らないのも不都合だ。

昔は主計之助を使ふ人形使ひが、後藤の左をふ使ものだと私は聞いて居る。私は人形の左使ひと云ふ椽の下の力持ち、即ち永遠に闇から闇に消えて行く人こそ、世に紹介しやうと樂屋を訪ねた。すると或る人形使ひは小割を絶対に教へない。私は馬鹿々々しさに吹き出した。

織太夫の堀川は與次郎が古靱ばなれがして佳作である。唯暇をシマと發音するのは困る。團六の糸は一例が「羊羹饅頭生肴」の邊はもつと弾いていゝと思ふ。上の太夫を弾く三味線は一體に遠慮し過ぎる難がある。私は石判刷の古靱太夫、清六の出現を恐れる。

文五郎のお俊は動き出すと其れ程とも思はないが、初め暖簾口から出た處は先々月の日吉のお政同様、入神の名人藝である。一體人形使ひには右手がどうの、人形が高いの低いのと結論的に云へば人形を人形として甘く使ふ點ばかりを稱讚して、人形を人間らしく使ふ甘さは割合に解らないらしい。玉幸の與次郎は佳作で、書置きの件に飯を食べてしまつてゐるのは賛成である。然し演出としては米びつの飯を食べるよりも、飯ごの残飯を食べる方が趣が深い。

筆燈するのは紋司のお鶴で、婆の「今日はまあ其處迄く」

の邊でもう三味線をかたづけけるのは、いくら人形は義太夫より早い方がいゝと云つても、あれでは寺小屋の涎繰りである。「與次郎はそばに高いびき」と云ふ文句は前から高駟をかい居ても差しつかへは無いが「抜く手も見せず切り付くる」と云ふ文句は其の前に切り付けては亂棒である。傾城反魂香では、道八の三味線がきわだつて光つてゐるのは流石である。

第二回

双蝶々曲輪日記の相撲場を始めて見たが平凡である。あれなら中車の濡髪や吉右衛門の放駒の方が色々面白い演り方で興が深い。特に玉藏の濡髪は玉幸の放駒より人形が低くて不調和で有る。

大隅太夫の引窓は、放生會と云ふ詩趣は無いが、濡髪、老婆共によく結構である。

人形は榮三の十次兵衛が美事な形式美が有つて、故雁次郎の悪寫實と較格しても結構なものであつた。

次の伊勢普頭の油屋は、一度土佐太夫の十八番物を聞こうと思つて居る内に隠退してしまつて、今に私は文樂の出し物係を怨んで居る次第である。封切りの甘い人だけに其のよさは充分想像出来る。

人形は小兵吉の前野が面白かつた。小兵吉に關しては人形通の小泉氏と私は全く正反對な意見である。同氏は文樂中一

番藝術欲を持つてゐる人と云はれるが、私は一番藝を投げてゐる人だと思ふ。腕はあるが藝術感の悪い人だと私は思つて居る。

尼ヶ崎は前半「片びさし」までの織太夫より後半の呂太夫の方が出来、人形は榮三の光秀が斷然群を抜いて、後半光秀の險惡な心持ちを善く出して居る。

第四の兜軍記では、久々で政龜の重忠が結構で、此の人は小兵吉と反對に動かないものに特色を出す。

第三回

夏祭浪花鑑は、床、人形共に平凡、只門造の使ふ義平次の頭が特異で面白い、眞青の顔で糸を引くと、口を大きく開くと同時に血走つた眞赤な眼が出て来る仕かけになつて居る。名稱を尋ねると○○氏は大虎と云ひ、○○氏はハンニヤ丸と呼んで居た。或は二つ名稱が有るのかも知れない、謹で教へを待つ。

大隅太夫の合邦は上出来である。地合の亂棒な獨特の味も復活し、足も早くつて結構、人形はいつも玉七の使ふ姿を小兵吉が使つてゐる、氣味が悪うはないか」で身ぶるひをしないのは小兵吉一流で「内と外」のあたり結構である。小泉氏の意見を眞とすれば小兵吉の一見識である。私の方で云へば小兵吉の無性である。

合邦の人形は私は三枚風に過る様に私は思ふ。初代玉造な

どは「俊徳様と女夫になりたい」で着物をつまを取つて女の振りをしたさうである、「幽霊」の文句で亡霊の手つきをする玉造型の仕方ばなしより。此處で自分でブル／＼と身をふるわせる多爲藏の演出を私は妥當と思ふ。

第三は雜誌「太棒」と私の苦手な妹脊山である。此れは何度聞き返してもクガ之助派よりも道八がぐつと數段上に聞こへて仕方がない。

人形は榮三の大判事が雄大無比で、上手屋臺へ上る件にチラと妹山の方を見る含蓄の有る演技が敬服である。一番悪いのが妹山の櫻の釣り枝、邪魔になつて紋太郎の桔梗は丸で見えない。

第四回

一日變りの千本櫻道行と酒屋は呂太夫の靜御前、伊達太夫の酒屋の日だつた。

小兵吉の宗岸は初めて見るがやつぱり玉次郎程味がない。

次の銘々傳彌作の鎌腹は六段目の茶番の様な感もあるが、彌作の腹を切る心理は勘平以上に我々に切實にせまるものがあつて、芝居から逆輸入の義太夫物中首位に位するものである。大隅も亦久々に、其の短所より長所の多く出る語り物で此の度の上京中の聴きごたへのあるもので、永いスランプにあつた無器用な猛打者の久々に放つた本壘打で有つた。廣助の糸も此の夜が一番いい。

人形は榮三の彌作が敬虔な好人物を美事に浮き出させた。次熊谷陣屋は前半和泉太夫、後半織太夫。人形は例の通り藤の方だけが政龜でなく小兵吉である。されば品位がなく、小兵吉は動きの多いものでなくては特色が出ない。榮三の熊谷は前半の左使は玉市で後半の左使は門造ださうである。がこれは別に意味があるのだらうかしら、調べて見たい。

相生太夫、道八の新口村は太夫は陰氣に三味線は派手に行

こうとする意途は成程と思へるが、道八の糸は丁寧過ぎて間延びがして時代物の感じである。情景を弾く事に一本氣過て太夫を助けるより、押し附けてしまった感があるのは私ばかりの謬見だらうか。

クガ之助派の人でないだけに卒直、大膽に所感を述べさせて頂く。

以上締切りに追はれて讀み返す暇もなく、粗雑此の上も無いのは恥しい次第で、讀者諸彦におわびして置く。

浄曲の『助六』

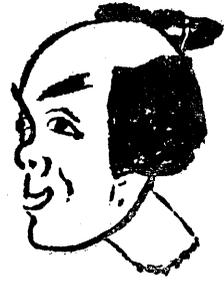
樂々翁

戯曲の助六も、歌舞伎十八番の助六も皆延寶六年に山本土佐様の芝居で、都一中が語り始めた『萬屋助六心中』に起因するといふ事を聞えたが、延寶六年から市川柏庭が初めて歌舞伎で仕組んだ正徳三年迄は三十六年の間隔があり、又並木丈助が作った『萬屋助六二代紙子』の淨瑠璃を演じた享保二十年五月までには、五十八年も経つた後であれば、其間、何か類似の作があつたものであらうと思

つてゐた處、偶然竹本座淨瑠璃外題年鑑に、寶永六丑年三月に『上巻助六千日寺心中』といふ外題を發見した。

此年代は總て近松の佳本を列れたもので、多分同氏の作であると思ふ。その全本を見たわけではないから斷言は出來ぬが都一中が語り始めた年代から三十二年後又歌舞伎の助六が起つた時から五年前に當るから、多分は此の千日寺心中が影響して二代紙子と變じ、又三十四年後に再轉して「紙子仕立兩面鑑」となつたものではないか。餘程古く者の話だが、歌舞伎座で九代目三升が此の助六を上演した時、批評家の中で年代の前後をも辨へず

柏庭が二代紙子の戯曲から材料を採つて轉作したやうな事を書いたのがあつたが誤謬も最も甚だしいものである。又當時單に三十二年前行はれた都一中の淨瑠璃に據つたとの説を書いたのもあつたが、拙老の推測する處は、千日寺心中の作が出て好評を博した事から、二代目團十郎が其又名のみを借用して、初めて歌舞伎に仕組んだのではなからうか。猿藏が助六狂言の口上に「元録時代の狂言で御座りますれば云々」と述べたなども、前述批評家同様年代お構ひなしであつたものと思ふ。



『のろま』の語に對する空想

中山徳太郎

古代學の研究家中山徳太郎氏から玉稿を頂きました。佐渡の「のろま人形」の始原から稿を起され、のろまの語に就ては大言海の説明より引き、更に氏一流の空想と解説を加へ、しかして古代人形なるもの、起原を説かれたもので、文樂人形を愛する我淨曲界にも、必ず好同伴たる事を信じます。——記者——

◇

佐渡郷土玩具の第一位を占めてゐる河原田人形は、昨年製作者佐々木與吉翁を失ふてからは、二代目は未だものにならず殆んど滅亡の状態であります。

河原田人形は佐渡に見る野呂松人形を模したものであります。佐渡には古くから野呂松（一名野呂間）人形があつて、宮寺に祭事等がある時は之を遣ふと云ふ土俗があるのであります。此人形の事を精細に書きましたものが澤山にあります。一郎君が會て「旅と傳説」に出した一文が其であります故、劈頭に博士のものを採率する事に致しました。（博士の御承諾を得たいと存じます）博士は此人形の起原を左の様に説いて

居ります。

元來「のろま人形」と云へば、例の野呂松勘兵衛なるものが紀の海音の淨瑠璃を讀んで、何か是を表現するものはないかと苦心の結果現はれたもので、江戸の和泉太夫座に於て其を開演、大いに喝采を博せしに始まる。（延寶年間）「のろま」は「野呂松」の略である。

佐渡の「のろま人形」に就ては「佐渡眞野村誌」に「寛保の頃野呂松勘兵衛と云へる人當國に來り、長石、四日町邊りに住せしが、初めは瓜、茄子に目鼻を付け人形に擬へて操り、後には松の木の瘤を切つて頭となせり。或時竹田の大膳祭に天鈿目命の形を作り、裝束を付け舞はせけるに、竹田の人某之を見て大に感じ、人形芝居を初

む。之竹田人形の濫觴なり」(下畧)。

醫博は「眞野村誌」の「のろま人形」の起原説に對して

(前略) 右の野呂松勘兵衛と云ふは、江戸に謳はれた野呂松とは、別人なる事は年代よりして明かなる事で、

且つ江戸の野呂松が佐渡に到つて、始めて茄子や木の瘤を創意して人形を操つたと云ふ事も、容易に信せられぬ事である。其は兎に角人形としては竹田人形よりは、北方人形の方が其の發生に於て早いのである。云々

と反對の意見を發表せられて居るのであります。次に佐渡では「のろま」人形と云ふ言葉を使はないで、普通唯「ニンギョウ」と呼んで居る。之に土地の名を冠して「北方人形」、「竹田人形」、「小木人形」、「澤根人形」

など云ふ。云々
之は實際であります。今こそ佐渡「のろま」人形と呼んで怪しまむ何人もありませんが、自分達の幼時玩具の人形を遣つて遊戯とした時代は「のろま」など云ふた記憶はありません。唯「ニンギョウ」でありました。而して竹田人形が人氣があつて、能く吾々子供は「竹田人形」と呼ばれた事は確實であります。其が何時の間に何人か「のろま」と云ふ様になり「のろま」人形は佐渡人形の代名詞化したのであります。河原田人形の玩具でさへ、河原田ののろま人形と固有の名として知られる様になりました。私は此一文では人形の起

原や、名稱を取扱ふ心持は毛頭ありません、少しく「のろま」と云ふ言葉に對する空想を洩して見度い野心のみより他ありません。其からお断りして置ねばならぬ事は、此稿は徹頭徹尾空想で終始して居る事であります。

◇ 「のろ松」がのつと出でたり夏月

此句は紅葉山人の句で、新町に碑があります。「のろ松」は佐渡人形の名稱に用ゐたものです。紅葉山人が佐渡へ來遊したのは明治三十年代でありますから、此頃既に「のろま」人形の名が佐渡にはあつたものと考へてよいと思ひます。「のろま」を一名「のろ松」とも申します。

「のろ松」が「のつと出る」とは人形の姿態を形容した文字ではありますが「のろ松」であるから「のつと出る」のであります。此處に「のろま」人形の素朴さと野趣滿々たる價值があるのです。私は「のろま」と云ふ言葉の有する意義にも「のつと出たる」と云ふが如き、素朴と野趣が含有されては居りはせぬかと思出したのが、此空想文の始まりであります。一應「のろま」或は「のろ松」を大言海が如何に吾人に説明して呉れてるかを檢べて見ますと

▽「のろま」「愚鈍」鈍^{ノロ}間^マ拔^ヒの下畧なるべし

(1)氣轉の利かずして遲鈍^{ノロ}き人を罵る語 遲鈍

雲錦隨筆(文久)四世俗の詞に云々愚鈍なるものを「のろま」或は「のろ松」など云ふ

▽のろま人形(野呂間人形)野呂松は前條の語に寄せたる
戲號ならむ

操り人形の一種、寛文延寶の頃野呂松勘兵衛と云へるもの
の創む、高さ一尺五寸許りにて頭幅く色黒き木像を舞は
して痴驗たる狂言を演ずるもの、畧して「のろま」次に
「のろまにんぎやう」又「むぎまにんぎやう」と云へる
もの起る、畧同種ありと云ふ。

浮世床(文化、三馬)初篇上、青くなりや「のろま」人
形で落ちをとらう、オット「のろま」は口なり高野そ
と出て居ります。此説明は普通あり觸れた解説で一般的の
ものであります。吾人の抱懐してゐる空想とは相去る事猶遠い
のであります。大言海の解説は嘘ではありませぬ、之に従ふ
のが世間一般で、敢えて異を立つる必要は認めませぬが、空想
と云ふ奴は、そんな微温的のものでは承知して呉れませぬの
です。そこで私は私一流の方法を用ゐて、空想に満足を與へ
て見度い氣になりました。私一流の方法と言ふのは

「のろま」を分解して「のろ」と「ま」として
解説を立てるのです、何故に斯くの如く二分するやの理由
は、追々此稿を進むに従ふて判明しますが、人形或は木偶の
有する靈(ありと假定して)に對して「のろま」を對立させ
る時には、どうしても大言海の説明文だけでは不可能である事
を見出すからであります。其ならば

「のろ」と「ま」

を吾人は如何に見、如何に取扱ふ可きやは、是又研究の要
あると思ひます。

「のろ」は詛 「ま」は魔
と見る徒であります。次に「詛」と「魔」に關して一應先
人の説を紹介する事にします。

松岡先生の古語辭典を繕いて見ますと

「ノロヒ」(詛)

(原)「ノリ」「宣」「ハヒ」(活用語尾)

(釋)原義は「ノリ」「宣」と同じく揚言の義であるが
轉義に依り咀詛を云ふにも用ゐらるゝ様になつ
た。

「マ」原義

(原)支那語「マ」「魔」「ミ」「魅」ラテン語の「マジ

」同源から出たのであらう。

(義)神でも人でもない有情の生物を意味する原語(1)
魔の意にも(2)動物の總稱にも用ゐられた。

(釋)上代人の觀念には神技カマタマにも人間技にもなる現象
は之を「マ」と云ふ、一種の有情生物の技として其
の作用を「マジ」と云ひ「マジ」を行ふ事を「マジ
ナイ」と稱へたのである、其は多く凶災をもたらす
ものであるので「マガ」と云へば、災害を意味し魔性
のものを「マモノ」と稱へ、或は「モ」と轉呼して喪

凶の義に用ゐられた。

と出て居ります。之で少しく自分の空想に近寄て來た事を意識しました。此「のろひ」の「のろ」と「ま」と結合した「のろま」には少くとも「マジモノ」即ち「マジナイ」の意義が含有せりとなすも不可なからんやと私は云ひ度いのであります。「マジモノ」「マジナイ」の意が「のろま」にありとすると、人形の靈との間に一脈相通する點があるのみならず、琉球の「のろ」即ち巫女とも其の血液は流れて居る事と想像致します。一體巫女は神の意を人間に通するのが其の職であります、其故に琉球の「のろ」は、本土の神人とも親類關係を有するものとも見られますと云ふよりも、神人と同一であつたものが琉球に残つたに過ぎませぬ。

琉球の「のろ」にしろ、本土の神人にしろ、人間と神との占位して、神の意を人間に傳ふる一面他に魔を拂ひ揚言(コトアゲ)して幸福を齎らず他面があるのです。

私は今一度考へて見なければならぬ事を思ひ出しました。其は大言海の説明に

▽「のろま」「愚鈍」「鈍間拔」の下界なるべし、(1)氣轉の

利かずして遅鈍き人を罵る語、遅鈍

とあります、其の一言です、愚鈍遅鈍の人をば其の文字通り見るのは世間並の考へでありますが、私の空想には是等の人々の有する性格には、世人が考へてゐるものよりも神秘的な或物を有つて居る様であります。

松岡先生が古語辭典「マ」の處で申されました「神ワザ」でも「人間ワザ」でもないと云ふ性格が奥深く潜在して居ります。其を証據立てるに一番良いのは巫人であります。巫女を職業とせる人を御覽になれば何人にも異議ない事と思ひます、敏捷と云はんよりは寧ろ遅鈍と申すのが當つて居ります。又神隱しに逢つた人を見るも、是又同一型の人間であります。斯んな性格と斯んな型と斯んな純情とを有つた人でなければ、神界を去來して神の言葉を下界の人々に運んで呉れる任務を果す事が出来ませぬ、神に奉仕する人間は之で良いのであります。其故に琉球の巫女を「のろ」と申しましたのも「のろま」の「のろ」の意義を含む靈媒人の關係語から出たものと私は空想します。

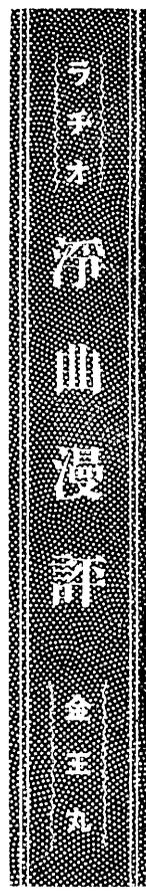
是で凡そ「のろま」なる語に對する空想の一半は畧ぼ言ひ得たと思ひますが、未だ残つて居る事は「のろま」と人形との關係があります、少しく次號に述べて頂きます。

繪絹・式紙・短冊

下谷區仲御徒町一ノ一七

波間 太郎 商店

電話下谷三七〇五番



文樂幹部 (七月二十六日)

攝州合邦辻 Ⅱ合邦庵室の段Ⅱ

竹本鍛太夫 絃 豊澤新左衛門

『しんたる柳の道、戀の道には暗からね共……』の出は、いかにも虐たげられた聲帯の荒びを聴かせて、あアまでど無くと、とおもはせたが、さて、だんだん聴きしんでゆくと、これは又鍛さん近來の大出來、といつては失禮か知らぬが此の人としては、實に最良の語り物であつた喜びを禁ぜられぬ。第一は、母親が飛でぬけてよろしい。最初の『これ合邦どの、今こなさん、何んとぞ云ふてか』の詞、先づやはらかに『ま一度見たい娘が顔』慈愛溢れて『疾しや遅しと聞く間も』抱きしめく嬉し泣きなど、頗る自

然に、殊に『今更あきれ、我子の顔、只打守る——』の巧さ、驚くばかりであつた。唯だアノ『嘘であらう、おゝく、おほゝゝ、嘘か』の笑ひが、宛て男のやうであつた。合邦も確かなもので『ヤイ畜生め』以下の長ゼリフも、どこまでも世話口調を忘れず結構。玉手御前の最初の『かゝさんく』は稍や老けたが『とゝさんのお腹立』から『お憎しみは御尤』や、例のあしのうらくくで『親のお慈悲』も可愛らしく出來、後の『あつちからも惚れもらう氣』など、滴るやうな色氣を聴かせた『納戸へ』までと終つたが、時々ボヤケて動いた寫眞のやうな所もあつたが、先代大隅太夫の舞臺を髣髴させて、我等別種の興味を覺えた事を特筆する。新左衛門帥の名絃、飽くまで美しくして而かも大きく、充分に巾

を聴かせ、時には鍛の聲は聴えずに、唯だ三味線が物をいつてゐるやうな箇所も少くなかつた。古靱さんの賣出し時分、先代清六の絃が、よく我等に此の感を與へた事を想ひ出した。鍛四分の新左六分といふ分にならう此の一段であつた。新左衛門帥の絃は、やがて文樂の至寶とならう。

文樂中堅 (八月二日)

鬼一法眼三略卷 Ⅱ五條橋の段Ⅱ

武藏坊辨慶 竹本相生太夫
ツ 竹本さの太夫
牛若丸 竹本伊達太夫
絃 鶴澤友次郎
鶴澤友造
鶴澤友平
鶴澤友若
はやし連中

大團平の作曲にかゝり、明治二十三年大阪御靈の文樂座で演ぜられた以來、上演されず、ラヂオにも無論初演であると

いふこの五條橋。内容は、俗説なり又「橋辨慶」で各種の上るりに演奏されるものと違ひはなく、唯だ歌詞と、節付に多少の相違をもち、とにもかくにも、珍らしいものであつた。殊に、文樂を引退したといふ名絃友次郎師の、指導なり自演なりで、興味も多く、太夫の方も先づは適材適所であつた『夕程なく夕暮の……』と相生のウタヒガカリの語り出しもよく、伊達も牛若の出から、美聲を發揮して結構「こなたはもとより法師の身、なまめく氣色アラいやよと……」など乙な文句もあり『斬てかゝれば』『打寄る劍』から『薄衣刎ねかけ若君は笑ひを含んで高欄に』のあたり中々おもしろく「すつくと立ちしあしたづの」裾を薙んと水車』の間の合の手に、友次郎師先づ充分に腕を見せ『蝶鳥などを見る如く』や、ツレの『晴れゆく月の影をひて……』も大層よかつた『しのぎけづりて』のあとメリヤス、我等初耳のやうにおもふ、『關羽の道行』の手とかいふ、これ亦た友師特意の壇場、最後の『祇園ばやし』

も賑やかに、お囃子連も、最初の中や、邪魔らしくあつたれど、鮮やかに、手揃ひで、此の曲に相應はしい事であつた。最後に少し、白壁の微瑕を拾つて言へば先づ前半のツレが不揃ひの難があり、最後名乗りになつて、相生の辨慶頗る小さくなり、伊達の若君、品位を喪くした。それから『抜きとる中も嵐の木の葉』の次ぎ『或は蜻蛉、水の月』を、セイレイと語られたが、これは或はカゲラフと言ふべき處ではあるまいかと思つた。口うつしに傳へられて文字通りのセイレイかもしれぬが、吾等はかけらふといふて欲しいとおもふが如何に？。

東京女義

〔八月十六日〕

岸姫松響鑑

朝比奈上使の段

彈語り 竹本素女

スキツチを入れて聽いてゐる中に思ひついた事を一つ書きにする。
一、『傍なる柱に猿繫ぎ』といふ文句をオクリにして『飯原兵衛、親仁が前に兩

手を突き』からであつた。それで最後が詠歌三番が濟んで『身を投げ伏して娘が首』で終つたから、表題の『朝比奈上使』は誰れもの詞の中にも一言も現はれぬ、されば聽き人には判らぬ道理である。よろしく、飯原兵衛館の段とすべきであつた。

一、例の彈語りである。得意の撥、結構には相違ないが、よく肝賢の處で、カケ聲をかけるので、氣が抜ける。それから又、調子を張る所では撥へも思はず力がいつて強過ぎる事になる。僕は常に、之れを困るとおもふ。

一、與茂作は結構な出来であつたとおもふ。時間で急いだのであらうか『テモ偕もサムライといふ商賣は』など少々判りにくかつたが『最前もアノ一間で手を合して拜みました』あたり無類であつた。

一、おそよは、總體に於て、色氣に乏しかつた。何か考へ過ぎてか、サラリとし過ぎた傾きで『鎌倉を見せていの』や『父上も來てたべと』や『足爪立て

」の説教節なども、今一ト息、受けさせても、素女理事長の估券にはさるまいとおもふ。

一、飯原兵衛は悪い。詞の粒が立たなかつた。存在が不明瞭であつた。

一、要するに、素女さんとして、我等の期待を裏切つたやうに感じた。聽いて居ながら、前に聽いた他の人々の、此のおそよが、夫からそれと想ひ出されたのは、當夜引つけられなかつた證據だとおもふ。

東京素義

〔八月二十一日〕

假名手本忠臣藏

山科の段

栗原千鶴

絃梅本香伯

目曜の晝間演藝、與へられた時間二十四分、何で充分な事が語られやうぞ。お石の『礎と引きたて入りにける』から『途方に暮れし折柄に』まで、これでも戸無瀬母子の肝賢なキカセドコロはそつくりある。このアトは、此の間津太夫がラヂ

オでも聽かせて呉れた。さて、我等のホープ、東都素義界の權威千鶴さんの出来やいかに。先づ以て賞すべきは、稽古の本格的にして嚴重なる事、一字一句苟くもせず、テツなどあつたらお目にかゝらうといふ位。第一、短時間ではあるが五分の隙もない、タルミのない、熱と緊張で塗り潰した二十幾分間であつた。強いて難をホヂクれば、熱演の結果、戸無瀬の詞『欲しがる所は山々』だの『虚無僧の尺八よな』など、男性になる處れがある。それから『そらいふ聲はお石様、そりや眞實か誠か』なども捧にならずに息を吞んで心理的の技巧が欲しいとおもつたのである。香伯老師の名絃、唯だ愛弟子を語り好くするに努めてゐた點も親はれて、結構と申しておかう。

文樂中堅

〔八月二十三日〕

伊賀越道中双六

沼津の段

竹本大隅太夫

絃鶴澤重造

今夏、文樂一座東上の時、さゝはる事あつて失敬した我等は、久し振りに四代目の大隅を聽くのである。殊に、この沼津は初耳である。先づ、『およねは一人物思ひ』の出から『奇妙に癒つたと、様の疵』のお米の詞の巧いのに驚いたものである。調子の奇麗な、色氣もあり、一種の氣品もあつて大いによろしい。ともすれば、外れ勝な此の人が、練磨の功か、つゝしんで語つた爲めか、危ないと思ふと、グツとめる。イヤ中々以て結構な工合で行つた『櫛笄まで』の『笄』がちよつと異様に聽こえたが、あれは或は、先代寫しの技巧であつたかとおもつた。お米に相當の點を入れたあと、さて平作である。やゝ遠慮勝ちのやうにも聞かれたが、松原になつて、馬力が加はり『おゝいゝ』など少々強過ぎて、息すたゝが取つて付けたやうだつたが、『親子一世の逢ひはじめの逢ひ納め』もよく、最後の落入など、充分に堪えさせたのは豪い。重兵衛は『荷物は先きへ』の出がけの笑ひが、聊か困つたが、じつ

と挽めて人物を出してゐた。難を言へば案外の嬉しさであつた。

東京女義

【八月二十五日】

奥州安達原

|| 袖袂祭文の段 ||

豊竹猿司
絃豊澤猿幸

時間に責められる結果知らぬが、大體に於て餘裕が無く、人形の思ひ入れの間が乏しい事である。總て走り過ぎてゐたとおもふ。重造師の絃は、さすがに、これも中堅どころ『したひゆく』の三重など、頗る好い音々を聞かせて呉れ、松原へ行つての、あしらひも、好感が持てた事の特筆する。最近、鍛君が『合邦』でヒットを放ち、今又、大隅氏が『沼津』をこれほどに聞かせて呉れたのは、寧ろ

二人ながら、赤坂のお師匠さん猿之助門下の達者揃ひ、そして、今や二人ながら、太の藝者として棲を取つてゐる人である。特に美聲といふほどでなくとも、

調つた咽喉を持つてゐる猿司、祭文の聽かせどころも、先づよく猿幸の絃と合つて結構だつた『後謳ひさしせき入る娘』から、思ひ切つて飛ばしも飛ばした『ハテぐづ付かずと早うおじやれ』と謙杖の詞だから、實をいふと譯が判らず。身は濡鷺のあし垣や——が今一ト息『親なればこそ子なればこそ』はどうにか出かす、といふ所。濱夕が泣き過ぎる位泣いたが、中々味を聽かせた。『見返り』でお時間一ばい。

秋の渡佐

(士河芳)

越後から吹く風に島は秋の立つ
夜光虫光れば散りぬちりあひぬ
豆柿の枝のたゆみや鶏舎荒び
月のなき岬は黒し沖明り
コスモスに風少しあり織る女
水のなき川の石高か秋の風
共通の湯札で秋時雨の島の石道
戸をあけて海にはまだ遠ふい屋根並き三日月
畦豆に風が立ち風から雨となり
磯で焚く芥燻り鳥迷い鳥から夜寒立ち

二百十日沖の一點の雲何と化す
紙芝居の叔父さんで通つて裏町の残暑
夜長の島に鈴振つて來て演習の始まり
演習の終りて島の夜長かな
防空演習
相川高田屋旅館にて、紅葉、小波、
水蔭の三先人の句を讀みて
盗人のなき島にゐて秋涼し
病中吟
島に病みて注射も利かす秋の風
少し眠りし藥利く間の秋日かな

津太夫今後の語り物に就て

—此の書を近江清華氏に呈す—

齋藤拳三

近江さん

私は突然未知の貴下に此の手紙を書きました。然し、此の拙文は事全部が貴下の御最厚き竹本津太夫の今後、東上しての語り物に關する事であり、太棹の讀者諸賢の内、多少でも此の事に關心を持たれる方があるとしたら、一人でも読んで頂き度く、失禮ながら公開させて頂く事としました。

先づ其の動機から申上ませう。

私は二十年前から、八堀江商店の近江さんの名を知つて居りました、然し其の人が東京素義の重鎮、清華氏で有る事を知つたのは此の二三年であります。

然し同じ義太夫愛好者でも、私の様な自分で語るよりも人形淨瑠璃芝居愛好の爲義太夫節を勉強しやうとする者と、御自身語る事以外人形淨瑠璃には餘り興味を覺へない愛義家とは近い様で甚だ遠い存在なのです。

最近も私は或る一部の素義の方を恐しく思ひました。お稽

古にいつてる師匠の誤りを紙上で指適する事は、太棹社へ迷惑がかかるのだそです。

凡そ世事に暗い私は、素義近よる可からずと一人極めに極めてしまいました。

然し私は數日ならずして、此れを釋然、徹退しなればならない嬉しいニュースを富取さんから聞いたのです。

七月十三日の新橋演舞場の文樂引越興行の千秋樂の夜です。

私と席を並べて見物した富取さんは、近江さんは文樂の東上する度におびたらしい切符を引受させられる事、津太夫も其の一人なる事、今夜は一世一代の心組みで語る九段目が初日に不出來だつたので津太夫は近江さんを招待して聽いてもらうので有る事、觀西翁襲名に就ても大半は貴下の涙ぐましくお骨折りで有る事、等、等。

藝人は己れの藝を知る人の爲に其の藝術を捧げて望しい、

捧ける津太夫、受ける清華、私は近來なげかほしい事のみ耳にする藝界に近頃でない佳話として田舎に歸る終電車の中で感激にふるへながらも、此のあたたかい佳話を胸にだきしめて家に歸りました。

我々微力な者が聲を枯らして太棹紙上に叫んだ處で、興業師は馬耳東風です。衰滅近きにある太棹節の最後の一燭光とも云ふべき、津太夫、古靱太夫の今後東上の出し物に關して近江さんにすがつて集團的な統卒ある進言をしやうと考へました。

年齢の點からいつて津太夫を先ず先にする事が急務でしやう。津太夫も明治二年の生れとすれば高齡七十歳、八十歳まで毎年一回上京するとして四回變りとしても總計四十段、東京人が下阪しないとすれば今後津太夫を聴くのは全部で四十段です、考へれば心細い限りです。これを藝術に對しては何の愛着もない、或は有つても麻痺して居る興業師に委せて置けば、毎年々々沼津と吃又を語らせて一生を終せる事でしやう。其れは土佐太夫がいく實例です。

私は上京する度に土佐太夫の語り物の餘り陳腐、繰り返しの多過る事を嘆き悲むのが年中行事でした、私が太棹に根氣よく毎號其れを書く以上に、松竹は根氣よく毎年々々酒屋と紙治を語らせて引退させてしまひました。

無論興行師はピラの利くものと云ふでしやう、で毎年四回變りの内二回だけを「紋下出し物研究會」とでも名づけた團體

で注文を附ける事としたら如何でしやう。

萬一此の最少限度の注文が通らない場合は、甘い強硬な非常手段が有りますが、其れは今發表致しませう。

で私は明治四十三年一月に大阪文樂座で津太夫が前名文太夫から津太夫を相續して以來、本城の文樂で演つて東京では出ないものだけを出演順に記して見ませう。

津太夫語り物一覽表（出演年月順）

八百屋猷立、本藏下屋敷、箱根靈驗餞別、新版歌祭文油屋垣生村、盛衰記勘當場、杵掛村、渡海屋、又助住家、相承名殘、白木屋、政清毒酒及本城、櫻丸腹切り、大文字屋、鱸七上使、大江山人身御供、竹中岩、廿四孝勘助物語り、芳流閣天下茶屋、國音詢音頭五人切り、引窓、鶯の森、伊勢音頭油屋、逆井村、四谷怪談、大晏寺堤、箱根靈驗阿彌陀寺、辨慶上使、岸姫松、阿漕浦。

以上紋下としては演れない様な立端場も御參考までに書き並べました。

尙東劇、及震災後の赤坂演伎座の素淨瑠璃及越路太夫在世當時三枚目としての上京の歌舞伎座の素淨瑠璃で語つたものも、一日だけの語り物故未上演のものに加へました。

尙、嬢景清八島日記、逆鱗、すし屋、河庄、双蝶々橋本、等は一二座きり出す佳作故再演の價値十分と存じます。

古靱太夫に對しては別に稿を改めて申上度存じます。

以上小供らしい小生の義太夫節に對する限りなき愛着と他意なき微衷を御賢察下さいまして御笑覽の榮を得ば幸甚に存じます。（八月廿九日記）

佐渡の句會 — 一人一句採録 — (芳生)

小木

今は俳界を遠ぶざかつてはゐられるが、小木には明治の末から大正六、七年にかけて、碧門として堂々たる「日本及日本人」の投句家であつた塚原天南星君がある。僕の滞在を機に俳句の會が生れたが、小木で句會が成立したなどといふ事は、小木としては前代未聞の出来事だと天南星君が言はれた。それ程に小木は俳人の少ない處で、今回の出席者は天南星君の外は殆ど初めて句を作るといふ人が多く、たま／＼心得のある人と言てもそれは所謂月並で、共に／＼低級なもの、中に一人醫師の岩田直英氏が初めての作としては群を抜いてゐる。却説、小木には紅葉山人の句碑もあり、山人が「汗なんどふいて貰ふて別れけり」の句を與へたお糸さんもまだ存命である。此お糸さんは「來いちゃ／＼て二度だまされた」の唄を、紅葉が三味線の皮に書いたその三味線を所持してをり、佐渡では國寶ならぬ鳥寶として有名なものであつたが、最近此の三味線が新潟方面へ賣られたといふので、心ある人々の惜んでゐるのも道理である。

颯風禍關西にあり天の川 天南星
 黄ばみたる山に溶けゆく雲白し 直 英
 更けゆけば岬の鼻に天の川 除 籟
 つどひつゝ夕餉に窓の月見かな 一 葉
 牧童の見えつかくれつ花芒 中 川
 月落ちて山影遠ふし虫の聲 杉 山

船場まで日に照らされて行く萩の花 無 齋
 喰ひかねて子供が投げる澁の柿 瓢 竹
 秋晴れやどこへ飛び行く赤とんぼ 丈 光
 みそ萩も添えてたむけん魂祭 幽 光
 馬方の聲もひゞきて枯芒 三久女
 樹々の妙岩々の奇や秋晴るゝ 芳河士

相川

こゝには佐渡俳壇の古老松岡金龜子氏がある。氏は毎日山に登り溪へ下り又山へと、老後の楽しみに經營されてゐる牧場と果樹園に通ひ、老いて益々康やかである。令息は佐渡電燈株式會社の支配人として堅實に精勤され、泰々と號して矢張り俳人である。

しかして相川には金子壁人、石塚碧郎、宇佐美起兆、市野鮎川の舊友の諸氏が毎月句會を開いてゐる。こゝは小木と斷然異つて海紅派の新進の作家揃ひで、鎌山には又別派の俳人が數名あつて此方でも毎月例會を催ほし、折にふれば無名異焼で有名な二科の同人三浦常山氏なども出吟するといふ賑やかさである。鮎川氏は都合で二回とも句會に見えなかつた事は残念である。

林檎色づきぬ北山に雲收まりぬ 金龜子
 秋晴れの海荒るゝ島の幾泊り 碧 郎
 足下の蟬穴へ雨流るゝさびしみ 經 狀
 干し蚊帳のたるみから姫が出る海原見え 起 兆
 氣づかほるる雨のまだ來ず胡桃割る子供 壁 人
 栗が落る窓に一人をり何んとう書いては破り 芳河士

朝に目覺めかすか別れ蚊の鳴く
眞晝猫の目の大きい秋は來たばかり
通草を取つた話通草を喰べた話冷やかな夜の灯
留め風呂の匂ふ窓の灯が消えそゝ萩枯るる
樹間尖塔にも秋立ち羽織着の吹かれ
一浦一と岬鳥渡るけふも波立ち
夜長の店で古い人形の寂しきを感じ

河原田

こゝには相川の金亀子氏と相並んで中山鳥賊氏が

ある。しかし、氏も久しく俳壇を離れて、此頃は醫業の傍ら古代學の研究に没頭され、佐渡民間傳承叢書第一輯として、氏と青木重孝氏共編の『佐渡年中行事』が最近東京の民間傳承の會から發行された。次に本間天川氏には廿三四年前同地で會つたさうだが、すっかり忘れてしまつて失禮をした。今回は計らず渡邊湖畔氏に逢ふ機會を得て非常にうれしかつた。氏は與謝野寛氏に就て歌道に精進され、佐渡の湖畔と言へば押しも押されぬ歌壇の一人者で、斯界では各誌の同人として重きをなしてゐる。氏は佐渡電燈の社長で邸宅は畑野にあつて、二三年此方俳句にも趣味を持たれ俳句の方では古半と號して盛んに作句をせられてゐる。配下には先づ松岡葵々氏があり、次いで我劣らじと社員諸君舉つて俳句熱旺盛を極めてゐる。

蚊帳つらぬ宿に羈愁の醉淺き 古半
蚊帳名残釣る手たゆたへ猫をふむ 葵々
秋の山こゝにも人が居りさうな 秋子
秋風や鏡につきし母指の跡 白風

吾が丈のコスモスあはれ横しまに
魚籠重く月の暈を歸りけり
里暗し茜に浮む秋の山
コスモスに風軽く雲の行方かな
病む牛の一つ離れて秋の風

麥薔畑の翳りて晝を峽の冷え
プラトナスの一葉黄ろく陽にたる
川を隔てゝ灯る二軒や露寒し
蜻蛉や村葬の幕張り終いて
橋下に麥薔の花咲く寄洲かな
桐一葉退院の日も定まらで
町を出て松原ぬけて鴉夕日

▲河原田で僕に贈られた諸氏の句を左に録して謝す。

刈田掩ふ雨雲に旅の憂からまし
君と酌みし事思ひ出す虫の聲
句筵かも回想の月おのがじ
木犀に開け放ちたる座敷かな
秋潮の磯に釣りませひねもすを

留別

贈られし句も爽やかに島の秋 芳河士

▲句會はやらなかつたが、羽茂では舊友風間公三樓氏と川口流石氏に逢ひ、小木の宿へも兩氏の訪問をうけ、澤根では山西氏に初めて會つた。

増補淨瑠璃に就て

宮澤淡々子

増補と稱して行はれつゝある淨瑠璃の數多き中に、佳作は屈指にも乏しい位でそれさへ殆ど一段ものに過ぎず纏つたものを見ない。増補物で上下若くば前後上

八島日記(明治元年)と題し、又「忠臣二度目清書」は正しく「假名手本忠臣藏」の拾遺で、「艶容女舞衣」は慥かに「女舞緞紅葉」の増補である。

中下、或は五段、七段、十段、十二段と纏めたなら、必ず一個の外題を附するに至るは、在來の院本に徴しても明らかである。

その他「金門五山桐」の「木下蔭菴間合戦」に於ける「金比羅利生記」の「花上野譽碑」に於ける「伊賀越乘掛合羽」の「伊賀越道中双六」に於ける「新版歌祭文」の「染模様妹背門松」に於ける「姫小松子日遊」の「平家女護島」に於ける

然らば何故に斯くするかと云ふに、作者が腦汁を絞つて綴り上げた一篇の院本を、あたふ他人が著作の増補とすることを、忍び得ぬ處から、別個の外題を撰び付したものと考へられる。彼の近松の「最

が如き、別個の外題は存しこそすれ、味い來ると一の増補ものに過ぎぬのである。

明寺殿百人女藏(元祿十六年)を西澤一鳳は増補して「北條時頼記(享保十一年)と名づけ、文耕堂の「大佛殿萬代礎(享保十年)を淺田一鳥は増補して「娘景清

斯くの如く増補であり乍ら其の名を乗らぬもの多き中に、珍らしくも確然と外題に増補の二字を冠らしてゐるのは「朝顔日記」である。(尙仔細に探り調べ

たら數もあらうが、院本の残り傳はらざるものは省き、茲には現に語りつゝあり又世人の多く知るものに就ていふ)他に「松王屋敷」本藏下郎の如きも増補と名乗り居れど、これは唯一段切りの端たるに過ぎない。さてこの「朝顔日記」の増補なるものゝ原本は嘗て院本として現代行はるゝ事は稀であるが、同本は彼の享和、文化より文政、天保の間に在て數多の戯曲を著作した山田案山子の遺稿を翠松園主人なるものが校補して嘉永三年戌の正月「増補生寫朝顔日記」と名づけて始めて世に出たものである。(一説には故鶴澤才二の父竹本繁太夫の作とも言へど信ぜられず)

元來「松王屋敷」なるものは、何人の作であるかは知らぬが、本篇「菅原傳授手習鑑」といふ傑作の増補としては、頗る價值なきに驚かざるを得ない。遺りたるを拾ひ、漏れたるを編み、缺けたるを補ひ、一部完璧の篇を成すと言ふことは増補の主旨とは言へ、同じ事を繰り反し妄りに立入つて本篇の筋に重復するは甚

だ以て感服しない。彼の寺子屋の段なる松王の詞に「女房千代と言合せ」云々、又「女房も何でほへる覺悟した御身替り内でぞんぶんほへたでないか」などの文句に基いて、此増補の一段を設けたものゝ如く、さりとは作者もなか／＼に探して思ひ付いた筋ではあるが、此「松王屋敷」は寧ろない方が却て「手習鑑」の趣味を深からしむるものと思ふ。何となれば、前舉の松王が僅かの詞で、其屋敷にて正しく愁歎のありし事を悟らしめ、蔭にて利かす所調作者の省筆法にて面白味が深いと思ふ。其れを明らかに此屋敷の一段を拵らへて、皮肉の間に潜伏した奇構妙趣の着想を態々暴露した事は、淺ましき戲筆（きげん）と謂ふべきである。且つ寺子屋に、

なさけなや此松王は時平に従ひ親兄弟
とも肉縁切り御恩受けたる丞相さまへ
敵たい

の文句あるに、松王屋敷に
猶さら惡事に一味と見せ勿躰なや親人
に勘當受けて兄弟に不和となり

と再び重復に顧りみるなく、又寺子屋に管秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目、よもや貴殿は討ちはずまい、なれども身替りに立つべき一子なくば如何せん

とあるにも拘らず屋敷の段に

管秀才を見分の役目仰せを受けし身の當惑、忠義一圖の源藏なればヤハカむざ／＼若君を討て渡す所存はなけれど多勢に無勢

と又もや重復の臺詞を挿入するなどは甚だ面白くない。殊に其段切の節付けを寺子屋の段切なるいろは送りの節付けと同様にしたに至つては愈々ます／＼不感服も甚だしい。

斯の如く舉ればこの「松王屋敷」なるものは畢竟蛇足の贅物といふのみである。去りながら段中また探るべき箇所なきにもあらず、彼の寺子屋に

北嵯峨の御隠家、時平の家來聞き出し
召捕に向ふと聞き拙者山伏の姿となり
危ふひ處奪ひ取たり

と松王の詞ある處から案じ出して、この

増補に管丞相の御臺所を隠まい置く一節を設け

危い所を漸う／＼と夫がこゝへお迎ひ申し又もや詫しいこのお住居、去りながらやがて目出度うお二方様にお目もふじマアそれ迄はお氣長う必ずきなきなお案じなふ時節をお待ちあそばせ

と女房千代が御臺をなぐさむる條から、御臺が歎きの一場を挿入せしは拔目なく氣が付いて頗る面白く、茲らが蓋し増補ものゝ特殊で價値は茲に存するものならんか、去ればとて僅かにこの一節の好趣向を以て、松王屋敷全篇の瑕瑾を償ふことは出来ぬのである。是れが前にもいふ「松王屋敷」はななくもがな的一段なのである。

素より寡聞陋見の後進、妄りに古人先輩の著作を捉へ來つて、敢て彼是と批評を試むる慢心ではないが、思ふ事は止なんは腹膨るゝの譬へもあれば、聊か思ひ當りし所を記して、同好諸君に問はんとするものである。

防空演習と湯原清司氏

品川防護團第一分團副分團長に就任

九月の防空演習頃には歸京の豫定で、繪筆を携へて佐渡へ渡つた私は、島に着くや間もなく病床に伸吟する身となり、佐渡の防空、燈火管制で眞暗な床の中で、湯原清司氏の事を思ひ出した。

湯原氏は軍器の製作に繁忙を極めつゝある中に、品川區防護團の第一分團副分團長、衛生部長等の任に就き、九月の演習に先立て、八月廿日に豫習のあつた時、鮫濱小學校の校庭で第一分團の會員が集つて、そこで就任挨拶を兼ねて演習の計畫の講演をされたさうだが、流石永年義太夫で鍛えた腹の強さと經驗とで、校庭の隅々まで聲が通つたといふ事

ある。

それに氏は家庭防火軍の部長となり、工場の全員をして銃後の任務に

當らしめ、嘗て、警察署長を始め、

八十二名の群長を自邸に集めて、工場へ爆彈が落ちたと擬して防火演習

を見せた處、その精鍊された事に署長も一驚を禁じ得なかつたといふ事

であるが、今頃は大東京の關門品川の防空演習に活躍されてゐる事であらう。(九月十五日佐渡にて芳河士)

東都五十義會に於ける

東西兩大關の榮譽

野澤道之助師部屋の光輝

第廿九回東都五十義會は別掲の通り、十月十九日より三日間日本橋俱樂部で華々しく開催されたが、東大

關は高瀬操氏動かす、これにて同氏は三回連続正大關の榮冠を得たわけ

で、西大關は前回と同じく及川旭氏

据はり、兩氏とも野澤道之助連で、

なほ又細川清氏は西小結に昇進し、

この重なる榮譽に、道之助部屋は旭

日の如く輝き賑つてゐる。

讀者の領分

匿名投書は掲載致しませぬ

遠ふからんものは音にも聞け
近くば寄つて目にも見よ

豊竹團蝶

こゝにあり

的野 關路

貴社發行太棒八月號にて「豊竹團蝶の行方」とある投書記事につき、永年同師を知る一人として、同女の爲め諸賢の諒解を願ひ度申述候

同師は行方不明に成りし事實無く、當時家屋修理の爲め近くの小さき家を借りて連中にも通知して稽古及び出稽古等缺勤した事御座無く候只外の連中や知己に通知するは一時的の事故に遠慮せし事にて、現在も今迄の所の近くに住所を置いて稽古中に御座候現住所は大井南濱川一六八二山田方に稽古場も同所に御座候又同女は頗るヒス云々とあるが、稽古に熱心なる師匠は見臺に向ふと強くなる者にて、決して其の爲め連中の迷惑になる如き事無御座候只非常に實直で堅た過ぎる程にて、其のかはり意地も強く我慢も強い女である事を斷言仕り候

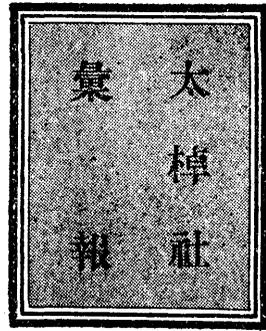
本來なれば樂々と世の中を過せる身なれ共、家族の反對を押し切つて今の年増盛り迄獨身生活を續け只々義太夫藝道に精神を打ち込み居る事は女として涙ぐましい努力と申す外無之候現在も其の努力を見込んで猿之助師も猛教練せられ居るは事實に御座候されば同女に同情して好評を成すが人情なるに、逆に同人の信用を害するが如き投書をするに至つては其の心理の程諒解に苦しむ者に御座候女の獨身生活は種々の障害に出會する者故投書者は多分女と思ひ悔りて慮外千萬な事を云寄り『ヒヂテツ』を食つた腹癒せの投書と思はれ候以上拙者責任を以て申聞き大方諸賢の疑惑を一掃する爲め一言申述べ候 以上

觀劇と世人の感想

森 三 好

太古は地下に穴を掘り住みしと云ふ、其後地上に家を建て現代は鐵筋コンクリート何十階と云ふ空中高く突出したる所に住む人力車が汽車と自動車と飛行機と其進歩發達は其極に達したり。是と同じく觀劇に於てもちよんがれが浮かれ節、祭文が變化して浪花節となり、又活動寫眞、新派、レビユー等西洋物迄何れ劣らぬ盛況を呈しつゝ

あり。然れ共仁義忠孝禮智信の五常の道を教訓的則ち勸善懲惡を至極結構に織り込まれたる高尚なるものは、我國固有の藝術舊劇及義太夫を凌駕するものなし。今日の劇界を試觀するに、活動レビユー萬才等は常に青年男女滿員の盛況を呈し、是に引替え舊劇義太夫の觀聽客は青年男女尠なく甚だ憾感にして、現在青年が如何に我國古典藝術擁護と云ふ精神の無き事を如日に物語るものと思ふ。此原因は多くの青年男女は親元に育てられ、成長中にして生活上諸般の事に未だ曾て苦勞したる事無き所謂難儀知らずの者が大部分にして、義理人情忠孝禮智信等演劇に仕込み觀せるも、青年には身に經驗無き事多くして理解淺く、隨て興味も薄きものと察せらる。今一ツは西洋かぶれして、何でも流行物の熱し易く冷め易しの觀覽物に壓倒されたるも疑ひなき原因なり。如何に文明開化と雖も義理人情を全く失ひたらんには、天地間の萬物の靈長たる人間として其尊き品位を缺き、畜類に近き有り様とならん。是が非に於ても今一層國粹尊重古典藝術擁護と云ふ觀念を以て舊劇義太夫の意味を理解し、青年男女皆々舉つて斯界發展に傾注せられ、之れが旺盛を期し以て人生の美風を高上あらん事を。



太樟社
景報

大阪 人形入 淨瑠璃會

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽種類の催はしの外前置きを略します。

— 記者 —

— 成べく開催順にしました —

御禮

弊社創立十週年に際し、其後左記兩氏より御祝ひの御芳情を忝ふし難有御禮申上候

太樟社

長谷川文久殿
山田清州殿

三越ホールの

義太夫會

兜會々長鈴木松實氏同副會長近江清華氏同顧問中澤巴氏の三氏に田口司重、野口みなと、玉司氏等を加へて、九月九日正午より日本橋三越ホールに於て義太夫會を開催、當日は劇界より井上正夫、澤村宗十郎、助高家高助を始め、其他花柳界より多數來聴、近江氏の應援につとめ、頗る盛況を呈した。

鈴木森(玉司、猿藏) 十種香(みなと、良造) 柳(司重、團吉) 寺子屋(松實、

去る九月大阪文樂座東上を機に、池田之助) — 人形配役 — 十次郎、宮里、三國氏主宰の南北座の後援、道之助會の彌左衛門(玉徳) 初菊(紋司) 操、宮城主催にて廿九日午後一時より淺草松屋ホールに於て、左の三氏出演のもとに大阪文樂人形入の淨瑠璃會が催ほされた。大柴(玉男) しげり(文枝) お政(門次) 阪文樂座の人形を遣つての淨瑠璃會は、東都の斯界には珍らしいものである。

呂) 維盛(文之助) 内侍、おせん(玉米) 壽式三番(吉田文枝) 太十(喜鳳、道之助) 白石(操、道之助) 鯨屋(清、道良吉) 村役人(萬次郎) 捕手(大勢)

團八) 講七(清華、寛三郎) 酒屋(巴、猿之助)

俱樂部にて久々に開催、師匠が瀧の川の事として人氣もあり頗る盛況を極めた。

光、佳照) 夕顔棚(龜鶴、重之助) 鮎屋(清、道之助) 吉田屋(光玉、佳照) 逆鱗(旭、道之助) 大切(掛合瀧) 勝五郎(さ

綾秀會

綾秀會は十月十三日夕より巢鴨西ヶ原

辨慶(綾路) 壺坂(歌吉) 合邦(壽光) 太十(てつか) 野崎(綾登) 安達(壽

章) 初花(和泉) 筆助(喜吉) 八公(美幸) 次郎(柏門) 絃(稻吉)

濱京素義聯盟會秋季大會

同會は十月一、二、三の三日間毎日午後一時より大井海岸鎮西閣に於て第三回秋季大會を開催。

(美義) 入平(其芳) 絃(團造) (二日目) 陣屋(東光、清調) 宿屋(佐喜子、雷糸) 本下(さとる、佳照) 先代

(三日目) 宿屋(其芳、清調) 八陣(東、佳照) 柳(光子、清調) 野崎(つる子、雷糸) 太十(美幸、稻吉) 中將姫(淺路、佳照) 岸姫(越司、昇之助) 沼津(美義團蝶) 引窓(乃菊、佳照) 忠四(貴昇、

(初日) 上かんや(いく子、雷糸) 太十(喜昇、團蝶) 壺坂(春日、雷糸) 太十(富穂、駒登太夫) 日吉(金龍、駒登太夫) 安達(可笑、團蝶) 忠六(春水、蟻子、蟻三郎) 鮎屋(梅笑、昇之助) 安達(とみ子、蟻三郎) 忠四(清水清司雷糸) 新の口(八千代、絃平) 太十(一鶴、駒登太夫) 中將姫(薰、雷糸) 志度寺(東光、絃平) 忠六(湯原清司、猿藏) 鮎屋(三芳、猿三郎) 圓覺寺(龜鶴、駒登) 大切(掛合合邦) 合邦(貴昇) 母(古清) 玉手

(延江、稻吉) 忠四(越司、昇之助) (壺坂) (小みどり、稻吉) 鈴ヶ森(敬子、雷糸) 河庄(三國、絃平) 太十(正佳、佳照) 二代鏡(喜吉、稻吉) 帶屋(かなめ仙照) 竹の間(其芳、重之助) 阿漕(柳光) 絃(絃平)

駒登太夫) 陣屋(巽、絃平) 宿屋(さ章、稻吉) 合邦(桔梗、辰六) 修善寺(古清、道之助) 沼津(大和、仙照) 大切(掛合太十) 光秀(貴昇) 十次郎(東光) 初菊(龜鶴) 操(其芳) 臯月(喜吉) 久吉(東光) 絃(絃平)

兜會秋季義太夫大會

十月九日正午より第十一回秋季大會を新築成りし濱町河岸の日本橋俱樂部に華

々しく開催。 會我對面 工藤(美浪) 五郎(松蝶)

十郎(其晶) 虎(三葵) 少將(八雲) 朝絃平) 引窓(和樂、猿藏) — 休憩 — 合邦 辨慶(秀玉、彌國太夫) 忠六(紅司、辰比奈(可笑) 近江(加保留) 八幡(團壽) (團壽、米翁) 赤垣(美浪、團八) 忠四 六) 鮮屋(義雀、良造) 沼津(乃菊、佳梶原(和加葉) (長唄囃連中) 先代(三(三幸、東) 乃木將軍(清華、寛三郎) 太照) 酒屋(山門、猿藏) 白石(操、道之葵、平八) 酒屋(朝正、寛三郎) 帶屋(和十(巴、猿藏) 大切(掛合堀川) 與次郎 助) 夜之部 三三(清司、猿藏) 陣屋(巽加葉、猿三郎) 安達(松寶、團八) 本下(美峰) お俊(清華) 傳兵衛(松寶) おつ絃平) 山名屋(山生、鹿重) 沼津(秋月、猿三郎) 忠六(二三樂、良造) 戀十(越巴、和歌吉) 忠四(旭、道之助) 紙治(千晴、團市) 太十(國聲、猿三郎) 合邦(桔梗、辰六)

帝都素義聯合會

豊澤猿糸師

割烹「春京」へ

帝都素義聯合會は第十回秋季大會を、十月十二、十三兩日午前十一時より左の番組に依り雷門並木俱樂部に開催した。
 (十二日) 本下(清香、蟻三郎) 酒屋(みやこ、美之助) 先代(松峰、鹿重) 寺子屋(和狂、猿藏) 辨慶(柳蝶、鶴玉) 彌作(いろは、團市) 美濃屋(金扇、染登) 野崎(生昇、猿三郎) 酒屋(盛鶴、桑造) 十種香(都昇、都大夫) 組打(關路、寛三郎) 夜ノ部 辨慶(司重、團吉) 合邦(素鶴、龜造) 安達(清雀、猿平) 紙治(其甫、猿藏) 安達(松寶、團八)

野崎(柳汀、鶴玉) 講七(清華、寛三郎) 酒屋(長平、龜造) 宿屋(美峰、猿之助) 岸姫(千鶴、猿平)
 (十三日) 玉三(都月、美之助) 野崎(和泉、蟻三郎) 太十(正佳、佳照) 十種香(みなと、良造) 合邦(市菊、桑造)

今春新義座を退いて京城に赴き、一意専心同地素義有志に稽古を勵んでゐた豊澤猿糸は、土地の料亭「春京」の未亡人と婚約成立、數日前に新町同業者へ婿入の挨拶にまはつた。

淨曲無名會公演

中澤巴氏の退會された同會は、新らたに東都五十義會東大關高瀬操氏の入會と共々しく開催されたが、今回は更に東都素

義界の重鎮安藤どくろ、保々長平の兩氏を迎へ、特別大會として十月十八日午后三時より濱町日本橋俱樂部に左記番組に依り華々しく開催された。なほ鈴木和樂氏の病中にて欠演された事は遺憾であつたが、星野桔梗氏が初席を承つて出演されたは、錦上花を添えたものであつた。

東都五十義會秋季大會

挨拶(國聲) 沼津(桔梗、辰六) 鰻谷(紅司) 絃(猿之助) 鮎屋||權太(清)お
 (どくろ、司好) 辨慶(國聲、猿三郎) 紙里(三芳) 彌左工門(素鶴) 維盛(關路)
 治(操、道之助) 逆鱗(長平、龜造) 野母(長平) 内侍(平茶) 村役人(桔梗)
 崎(美峰、猿之助、ツレ松四郎) なほ次梶原(千鶴) 絃(道之助) 忠七||由良之
 回は十一月六日九ノ内電氣俱樂部に開催。
 助(光樂) 九太夫(國聲) 重太郎(千鶴)
 彌五郎(清) 喜多八(操) おかる(三芳)
 力彌(市菊) 伴内(平茶) 平右工門(桔梗) 絃(猿三郎)

東都唯一の傳統を誇る東都五十義會は十月十九、廿、廿一の三日間午前十時より星野桔梗、吉田三芳、長谷川文久、安藤光樂四氏審査のもとに第廿九回大會が開催されたが、別掲採點の外毎日左の通り掛合が上演され、終演後、例に依り挨拶、優賞品授與式、東西大關旗授與式があり、萬歳を三唱して芽出度散會した。三日間の掛合左通り。

(初日) 忠六||勘平(市菊) 母(乃菊) 郷右衛門(壽瓢) 彌五郎(貴昇) 絃(龜造) 本下||若狭之助(桔梗) 本藏(國聲) 三千歳姫(操) 伴左衛門(美峰) 下部(三

芳) 絃(辰六) 陣屋||熊谷(素鶴) 相模(長平) 藤の方(操) 義經(桔梗) 軍次(文久) 絃(龜造) 野崎||久作(清) お光(高尾) お染(美峰) 久松(金鳳) 母(桔梗) 下女(旭) 絃(道之助、ツレ扇之助) (二日目) 宿屋||駒澤(其芳) 朝顔(壽瓢) 岩代(貴昇) 徳右衛門(龜鶴) 若侍おなべ(市菊) 絃(龜造) 寺子屋||松王(國聲) 源藏(三芳) 戸浪(可遊) 千代(松實) 玄蕃(關路) 御臺(壽瓢) 百姓

表と重複するので掲載を略す。

(三日目) 辨慶||辨慶(貴昇) おわさ(龜鶴) 信夫(其芳) 侍従太郎(乃菊) 郷の君(市菊) 花の井(壽瓢) 絃(条造) 布四||檢校(文久) 小櫻(千鶴) 平次(光樂) 藤作(桔梗) 又五郎(三芳) 局(乃菊) 絃(猿平) 太十||光秀(歸世花) 次郎(美鹿) 初菊(巴雀) 久吉(未定) 操(里芳) さつき(叶) 絃(扇之助) 阿古屋||重忠(清) 阿古屋(三芳) 岩永(桔梗) 榛澤(呂聲) 絃(猿之助、ツレ猿三郎、芳太郎) ……採點出演番組は、採點

中老會秋季大會

裏に松岡茂里雄氏入會せられ、又々新らたに沼井盛鶴、北島北斗の兩氏加入、

九月廿三、廿四の兩日文化俱樂部に第七回を開催した同會は、第八回を秋季大會として十月廿三日正午より淺草並木俱樂部に於て賑々しく開催した。

第七回番組(初日) 本下(有明、新兆) 安達(奇聲、和歌吉) 日吉(盛鶴、糸造) 酒屋(松玉、松四郎) 忠六(紅司、勝鳳) 帶屋(春和、糸造) —— 二日目 —— 組打(有明、新兆) 橋本(操、道之助) 忠四(越巴、廣助) 新口(可松、糸造) 岡崎(北斗、廣助) 戀十(茂里雄、清助) 第八回大會番組(太十(掛合)光秀(盛鶴) 十次郎(春和) 初菊(松玉) 操(可松) 皇月(紅司) 久吉(北斗) 絃(松四

郎) 組打(有明、新兆) 安達(奇聲、和歌吉) 大晏寺(盛鶴、糸造) 引窓(紅司、勝鳳) 重の井(越巴、廣助) 忠六(茂里雄、清助) 寺子屋(掛合) 松王(北斗)

千代(越巴) 小太郎(有明) 百姓(春和) 玄蕃(盛鶴) 菅秀才(松玉) 御臺(奇聲) 戸浪(操) 源藏(紅司) 絃(糸造) 鯨屋(松玉、松四郎) 帶屋(春和、糸造) 新口(操、道之助) 合邦(可松、糸造) 日吉(北斗、松四郎) 野崎(掛合) 久作(春和) 久松(紅司) お染(可松) お光(操) 母(盛鶴) 下女(有明) 絃(道之助、ツレ美之助、越道)

玄素聯合淨曲研究會

岡田蝶花氏の主宰にて玄素聯合淨曲研究會が生れたが、發會の挨拶は左記の通り。

御挨拶

淨瑠璃は過去の旦那藝ではなくて、眞

劍に研究す可き偉大な藝術であると吾等は確く信じて居ります。こゝに吾等志を同じうする者二十數名相寄り月々二名づゝ交替にて出演し大方の士の御批判を仰ぎ度いと思ひます。これに

賛同された玄義十數名も加入毎月一名づゝ大切に出演し相共に研鑽を積まれる筈。かくて斯道は益々隆盛に赴くと信じます。敢えて發會の御挨拶といたします。

なほ第一回を九月三十日後午六時より第一徵兵保險の講堂に開催し、引續き第

胃腸に……

ミラカチ

二回を十月廿六日同講堂に開催し、出演者は左の通りである。

(第一回) 太十(蝶花形、良造) 山名屋(其甫、猿三郎) 合邦(巖太夫、猿藏) (第二回) 美濃屋(葵、良造) 堀川(初音、司好、ツレ好造) 中將姫(佳照、清一)

滿鮮素義大會の成績

前號既掲の通り滿鮮素義大會は、竹本角太夫、麻生五福兩氏審査のもとに七月九、十兩日開催されたが、審査の結果百七十點の楓江氏を筆頭に、喜登、紫扇、登鶴、あさひ、濱屋長門、翠香、新昇、喜峰、古雀、望月、胡蝶、華名目、泉、新浪花、佳美、貴勢、水音、卯雀、關長た。

大 大日本素人淨瑠璃會

大阪に於ける大日本素人淨瑠璃會は、一月十九日より三日間堀江演舞場に於て竹本大隅太夫、竹本鍛太夫、竹本文字太夫、鶴澤叶、豊澤團友、豊澤仙糸、伊東柳平、笹村ふんど、萱林松玉の各系統九名審査のもとに第六回競演大會を來る十

合邦（掛合）玉手（彌國太夫）入平（麗太夫）母（稻太夫）合邦（駒登太夫）絃（糸造）瀧（扇賀太夫、蝶三郎）太十（巖春太夫、美之助）小磯（近衛太夫、猿喜知）竹の間（巖太夫、猿藏）山名屋（浪花太夫、道之助）安達（柚太夫、松市郎）聚樂町（朝見太夫、芳太郎）玉三（湊太夫、猿三郎）沼津（殿母太夫、良造）松王郎（都太夫、龜藏）鈴ヶ森（越喜太夫、新造）陣屋（麗太夫、玉勝）壺坂（駒登太夫、扇之助）鮎屋（彌國太夫、寛三郎）紙治（稻太夫、辰六）大切。本下（掛合）若狭之助（朝見太夫）三千歲姬（都太夫）伴左工門（湊太夫）本藏（殿母太夫）絃（猿之助、琴、松四郎）

表装の丁寧と廉價は

弊堂の特色

本郷・菊坂一

辛 弘 堂

十月十五日午後一時より左の番組に依り雷門並木俱樂部に開催。

日本帝都義太夫因會大會

竹本素女公演會

當座帳

十月六、七兩日午後五時より仁壽講堂に於て第十六回を開催、今回は大阪より豊竹團司、豊澤小住遙々出京、應援として出演し頗る賑ひを呈した。

(初日) 御祝儀(素花、素丸)新口村(素次、駒登久)蝶八(素八、駒清)野崎(素廣、猿昇)合邦(佳照、清一)柳染屋(素女)鳴門(素國、素八)

登、巴住(先代(團司、小住)堀川(素女)大井川(素國、素八)

(二日目) 御祝儀(素花、素丸)辨慶(素次、駒登久)酒屋(素八、駒清)寺子屋(素廣、猿昇)壺坂(佳照、清一)太

十(染登、巴住)帶屋(團司、小住)鮎屋(素女)鳴門(素國、素八)

子女淨瑠璃研究會

ものごとは復興する時の勢ひ程強力のものではなく、女子淨瑠璃研究會の復活もその如く先月華々しく復興第四十四回を開演したが、矢繼早やに十月十四、十五の兩日午前十一時より第三十五回を上野鈴木演藝場で開演した。なほ次回は十一月十七、十八の兩日であると。

(十四日) 白石(佳世子、駒照)紙治(越道、仙玉)岸姫(彌周、清三)湊町(素昇、猿玉)重の井(越駒、紋教)吉田

屋(猿司、松四郎)大切。猪名川(おとわ、駒若。猪名川、佳照。鐵ヶ嶽、染登大阪屋、綾千代。呼出、若好)絃(二三龍)

(十五日) 船別(佳世子、駒照)佐太村(駒若、二三龍)山名屋(佳照、清一)合邦(染登、巴住)辨慶(綾千代、猿玉)壺坂(若好、清二)大切。宿屋(深雪、越道、駒澤、彌周。岩代、素昇、徳右工

門、越駒。下女、猿司。船頭、佳世子)絃(仙玉)

▽錦 錦松氏 令息文四郎君は八月十五日山形廿二聯隊へ入隊、三週間後直ちに出征せらる。

▽中澤 巴氏 無名會を退會。

▽高瀬 操氏 無名會へ入會。

▽安藤どくろ氏 同上。

▽保々長平氏 同上。

▽沼井盛鶴氏 中老會へ入會。

▽北島北斗氏 同上。

▽的野關路氏 鶴澤寛三郎師に入門。

▽横濱金港花くらべ會 隆松館にて十六日より十三日間開催。

▽鶴澤觀西翁 日本帝都義太夫因會々長を辭任。

▽豊澤鶴助 淺草區石濱町二丁目六番地へ移轉。

▽竹本米翁 引退興行として信州路を巡業。

▽野澤吉作 芝區西久保巴町四八番地へ轉居。

▽松葉家音譜普及會 滿三週年記念として橋本全九枚、御所三全九枚、堀川全拾枚を發表、豫約申込みを開始。

新義座十一月東上

新義座の一黨は乙女文樂を引連れ、十月六日青森中央館を振出しに、七、八日函館吉野演舞場、九日又々青森に戻つて五所川原に、十日より弘前市弘前座を始め秋田、仙臺、若松等各所好評裡に公演し、十九日より新潟縣に入つて先づ新潟劇場を振出しに長岡、三條、小千谷、燕と巡業し廿四日は佐渡に渡つて兩津港の兩津劇場に於て開演の上廿六日歸阪する事になつたが、一黨は十一月十七、十八日の二日間上京仁壽講堂に於て午後五時より公演と決定、なほ税金共にするが、それとも税金は別にするかは未定であるが、兎に角入場料を金壹圓に改める由に

(十七日) 市若初陣 (越名太夫、綱延) 油屋 (叶美太夫、勝芳) 布四 (陸路太夫、徳若) 油屋 (南部太夫、勝平) 大切。戻橋 (悪鬼、越名太夫。渡邊の綱、隅榮太夫。勝芳、綱延、徳若)

(十八日) 葛の葉 (越名太夫、勝芳) 日吉 (隅榮太夫、綱延) 山名屋 (陸路太夫、徳若) 太十 (南部太夫、勝平) 大切。大星十八箇條申開 (彈正、隅榮太夫。多聞守、越名太夫、由良之助、叶美太夫。勝芳)

て、同座の努力の程がうかゞはれる。二日間の語り物左の通り。

大阪文樂座十月興行

大阪文樂座は十月七日より本城たる四ツ橋文樂座に於て本格興行として華々しく開演した。

忠臣藏 大序 (直義公、和泉太夫。師直、長尾太夫。顔世、源太夫。若狭之助、竹太夫。判官、宮太夫。常子太夫。喜代

之助、八造) 殿中 (大隅太夫、廣助) 裏門 (源太夫、吉彌) 四段目 (駒太夫、清二郎) 霞ヶ關 (播路太夫、喜代之助) 二

ツ玉 (和泉太夫、重造、友衛門、胡弓吉藏) 身賣 (鍛太夫、新左工門) 六段目 (津太夫、綱造) 七段目 (由良之助、大隅太夫。重太郎、富太夫。喜太八、千駒太夫。彌五郎、さの太夫。おかる、伊達太夫。

仲居、松島太夫、宮大夫、常子太夫。伴内、播路太夫。九太夫、長尾太夫。平右工門、呂太夫。叶)

玉藻前 中 (文字太夫、吉左) 切 (古靱太夫、清六)

蝶の道行 助國、相生太夫。小卷、織太夫。ツレ、駒若太夫、相瀬太夫。道八、寛治郎、團六、吉季、友三郎、清友)

兜會

臨時 義太夫大會

漢口の陥落を祝し、九月二日淺草雷門並木俱樂部に於て臨時義太夫大會を開催。

東京淨瑠璃人形芝居

衰退に傾きつゝある人形淨瑠璃の前途

レ松市郎)

を憂慮し、池田三國氏が事業の傍ら文樂

座の桐竹門造師を始め、東京の人形使ひ

吉田冠十郎、國五郎等に就き専念人形淨

瑠璃に腐心し、南北座を主宰してこれが

普及に努力しつゝある事は、丸ノ内蠶糸

會館に於て第一回の旗擧げ當時より既に

斯界一般に認められ、その後各所に催は

し又は傷病兵慰問に、或は出征家族慰安

にと努めらしその業績は、東都大新聞社

まで大に賞讃する處となり、氏の練磨精

進は益々域に達しつゝあるが、十月廿四

廿五の兩日午後五時より蠶糸會館にて秋

季特別公演として左記番組に依て賑々し

く開催された。

(廿四日) 陣屋(杣太夫、松市郎) 壺

坂(朝見太夫、芳太郎) 笛出雲原作、竹

本浪花太夫補訂作曲。右大將鎌倉實記靜

御前舞(浪花太夫、道之助) 日吉(都太

夫、猿藏) 野崎(彌國太夫、寛三郎、ツ

(廿五日) 沼津(杣太夫、松市郎) 白

石(朝見太夫、芳太郎) 玉三(彌國太夫

寛三郎) 新口(浪花太夫、道之助) 太十

(都太夫、猿藏)

人形配役 相模、靜御前、お政、お光、

お米、萩の方、操(三國) 藤の方、景高

竹松、お染、しのぶ、桂姫、梅川、初菊、

(國三郎) 軍次、景時、吉晴、久松、宮柴、

初花、久吉(弦之丞) 熊谷、お里、重忠、

五郎助、久作、平作、宮城野、鷺塚、孫

右衛門、光秀(國五郎) 澤市、工藤、久

吉、お勝、重兵衛、惣六、采女、忠三女

房、十次郎(清三郎) 政子の方、忠兵衛、

政清(東十郎) 老母(傳次) 早太、老母、

宮里(冠次) 老母(藤三郎) およし、孫

八、八右衛門(傳藏) 忝(小信) さつき

(傳造)

安藤光樂氏より

拜啓御承知の谷口三響氏(響阿彌)は去る八月十五日鳥取にて永眠致され候同氏は東都にて暫く没交渉の型ちと相成居り、傍時代の變遷と共に一般素義界の顔振れは新陳代謝となり、從て三響氏の名前も知らぬ方の多き現狀故、貴誌に掲載する程の事無之候得共前世紀には一代の名物男として花やかかなりし事も之有候故寸行を御奉仕くだされば幸甚の至りと存候

三響氏は鳥取縣倉吉町の人、現住所は同所公會堂内、病氣はチブス、八月拾五日死亡、享年七十五。同地よりの電報に依り、妻女ろくさんは即刻出發同地にて茶屋に附し遺骨を持歸りしは廿八日。生前東京の友人戀し懐しに憶がれて居られた事は度々小生方へ申越され居候依て中澤巴氏とも相談し、本月拾九日(三十五日忌相當)に告別式を營む運びと相

成し處、朝鮮在住の長男正春君が本月四日出征する事と相成、本人よりの電報にて自分が凱施したら東京で告別式を施行するから、夫れ迄延期して呉れとの依頼に依り無期延期と

致候
妻女ろくさんは世田ヶ谷經堂五番地に一戸を構へ四人の子供と同棲して居ります。

谷口三響氏の永眠

月日の經つのは早いもの、谷口三響氏隨を許さぬもので、嘗ては引退披露も飛が東京を去て、故郷鳥取の倉吉町へ赴かれたのは最早六、七年前になつた。氏は晩年響阿彌と號して東都素義界の古老であり、氏の大晏寺や盛綱と云へば、他の追

名 豊澤松太郎師逝く

淨曲界の古老三絃の名人豊澤松太郎師はれたが、東都淨曲界は申すまでもなくは、豫て病氣療養中の處、去る十月十九日午後二時十五分遂に逝去、廿一日正午より一時迄濱町の自宅に於て告別式が行

豊澤雷助師

師は大阪出身にて、十一才にして五代目豊澤廣助の門に入り、稻荷座、彦六座

に出勤し、廿三才の時に上京し廿六才豊澤雷助と改名し、當時竹本組太夫、竹本朝太夫或は竹本相生太夫の一座に加入せし事あり、日本帝都義太夫因會の會計に就任すること多年、其功績少なからざりしが、十年の晩秋發病して爾來立つ事能はず、遂に去る八月十五日午前二時四分逝去された。

豊澤良平師

追善義太夫會

豊澤良平師十七回忌に相當する十二月五日、並木俱樂部に追善義太夫會を開催。

お詫び

小生儀八月佐渡に渡り間もなく病臥致し候爲め歸京相遅れ幸ふじて先日歸宅仕り候得共打續く冷雨に涉々しからず本號の大延刊何んとも恐縮の至りに堪えず候何卒御海客賜り度此段以誌上御詫び申上げ候

富取芳河士

第廿九回 東都五十義會成績表

本號彙報に記載の通り、第廿九回東都五十義會は、去る十九日より三日間日本橋俱樂部に於て盛況裡に終演をつけ、採點の結果左の通り。

點數	雅號	點數	雅號	點數	雅號
一七六、〇〇	操	一四七、〇〇	鳴門	一三六、二五	美義
一六七、〇〇	旭	一四六、五〇	乃菊	一三四、七五	金鳳
一六六、七五	紅司	一四六、〇〇	柳光	一三三、五〇	百塚
一六四、五〇	呂聲	一四四、〇〇	龜鶴	一三一、二五	文樂
一六〇、〇〇	光玉	一四三、〇〇	松玉	一三〇、五〇	蟻若
一五八、二五	清	一四二、五〇	糸樂	一三〇、二五	いさを
一五七、七五	巽	一四二、五〇	喜國	一二九、七五	喜鶴
一五四、二五	東光	一四二、〇〇	淺路	一二八、五〇	素峯
一五三、五〇	玉寶	一四一、二五	古清	一二八、二五	豐
一五三、〇〇	春樂	一四一、〇〇	市菊	一二七、七五	紅陽
一五二、〇〇	高尾	一四〇、七五	綱路	一二七、〇〇	吾樂
一五一、五〇	枝蝶	一四〇、五〇	司重	一二七、〇〇	一鶴
一五一、二五	米司	一三九、七五	錦司	一二六、二五	銀司
一五〇、五〇	貴昇	一三九、二五	錦松	九三、二五	つつか
一五〇、二五	龜鶴	一三九、〇〇	よろづ		
一四八、五〇	筑波	一三七、五〇	丸都		
一四八、二五	美昇	一三六、五〇	其芳		

入賞 一等(柳光) 二等(司重) 三等(春樂) 等外入賞(玉寶)
 出演者數最高賞 十名(道之助) 七名(佳照) 六名(駒登太夫) 五名(榮造) 四名(彌國太夫、重子、昇之助) 三名(松四郎、清松)

會報

敬投 迎稿

三華會

森 三好

過日既に新聞紙上に於て御覽の如く、文部省に於ては校生蕭正の意義にて、各中學大學を始め青年諸學校慰安の爲め、高尚なる娯樂の機關を設くる事となれり。茲に於て吾が愛義同志は三華會と云ふ會を組織し、卒先躬行我國固有の古典藝術義太夫の尊重と其興味を該方面に披瀝し、以て斯界の發展と慰安に資せん爲め、牛込區鶴卷町に於て旺んに斯道研究練磨中なり。三華會中華代嬢は幼少未だ三絃の膝に座らざる頃より義太夫師匠鶴澤春世師に付き嚴格なる稽古修習の裡に育ち、更に躍進六ヶ年の永き日月星霜を一日の如く巴太夫師に學び其効空しからず、語り三絃共に熟達眞に帝都青年女義界の花形なり。因に本會の會則としては、心身を鍛鍊し、日本固有の古典藝術義太夫を擁護し、併せて其興味を披瀝するを以て目的とするものなり。

會員(いろは順) 神元連捷、高橋十三三、園田園樂、村上しげる、大久保美蝶、見田村雨森三好。なほ第一回を九月廿五日菊川俱樂部に開催せり。

本誌名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

高島 一廣氏
 廣瀬 いろは氏
 岡崎 田六氏
 吉川 浪補氏
 平野 ろ昇氏
 阿部 一氏
 北島 北斗氏
 中澤 巴氏
 竹内 とをる氏
 安藤 どくろ氏
 吉田 登盛氏
 小川 都山氏

安藤 都昇氏
 保々 長平氏
 栗原 千鶴氏
 神馬 里芳氏
 本木 大熊氏
 鈴木 和樂氏
 小林 和舟氏
 本多 可笑氏
 大和田 可笑氏
 飛石 かなめ氏
 加藤 兜氏
 高橋 可遊氏
 西田 可松氏

大用 大嘉津氏
 田口 辰壽氏
 疋田 大龍氏
 井上 巽氏
 小林 太二八氏
 根本 團壽氏
 野田 高尾氏
 坂倉 素遊氏
 浮谷 祖樂氏
 小埜 長とろ氏
 宮本 武藏氏
 萩原 うつぼ氏
 乃村 乃菊氏
 中野 吳羽氏
 山下 彌生氏

國井 丸都氏
 松林 福笑氏
 鈴木 兒雀氏
 水戸部 壽氏
 原田 越巴氏
 河野 國聲氏
 松岡 語松氏
 田中 湖月氏
 寶藏寺 天昇氏
 大築 葵氏
 松本 朝章氏
 及川 旭氏
 柳 有明氏
 寺岡 三幸氏
 木村 さかえ氏

齋藤 山生氏
 平井 榮氏
 細川 清氏
 金田 金鳳氏
 井田 菊泉氏
 錦 錦 松氏
 淺田 奇聲氏
 歸山 歸世花氏
 川奈部 銀司氏
 猪谷 銀水氏
 岩木 義雀氏
 吉良 蟻若氏
 岩田 末成氏
 高瀬 操氏
 吉田 美地旬氏

横井 三由氏
 野口 みなと氏
 岡田 源氏
 北村 三葵氏
 池田 三國氏
 吉田 三芳氏
 鈴木 松寶氏
 玉井 松樂氏
 菊池 秋月氏
 平井 壽樂氏
 山田 壽瓢氏
 田口 司重氏
 濱口 秋華氏
 武笠 宏亮氏
 高品 一重氏

桑原 美峰氏
 松岡 茂里雄氏
 白井 清華氏
 近江 清華氏
 湯原 清司氏
 沼井 盛鶴氏
 時田 靜史氏
 (地方之部)
 米國 平野一昇氏
 同 武 榮玉氏
 同 杉山 陶岳氏
 同 兼廣 廣玉氏
 同 西本 西紫氏
 榎太宮 下杉 鳳氏
 横濱 田島 集樂氏

大垣 吉岡十八公氏

寄贈新刊

▼明るの家▼ましろ▼浄曲新報▼土
▼文樂▼痴遊雜誌▼寶塚月報▼露
▼獺祭▼大日本淨瑠璃雜誌▼可樂▼オ
ール演藝▼淨瑠璃時報▼藝▼京城の
ラデオ

訃報

◆阪口照玉氏 横濱素義界の重鎮阪口照玉氏は八月六日永眠。

◆梅本あい女さん 鶴澤觀西翁師の妻女あい子さんは、大森にて永々病臥中の處、八月十三日逝去。享年七十四。

編輯後記

◆秋冷の候皆々様御健勝にて、お稽古に、お催ほしに、益々御精進の程度賀申上ます。
◆九月には又々文樂の若手で東上、それに九月からは本月にかけて小會大會盛んに打續いて催ほされ、招待券、番組等お送り下され難有うございませした。何分永々不在の爲めと、か

らだがまだほんとうでないのとて、拜聴を得なかつた事は遺憾であります、お送りに預りました番組は、全部本誌に掲載、彙報欄の増頁で賑々しくなつて嬉しい次第であります。

◆日本橋俱樂部も新築落成、大變に綺麗なさうですが、義太夫界では兜會を第一に無名會五十義會と開催され、華やかな事であります。

◆それに引かへ又訃報の多い事、その中にも薬に日本帝都義太夫因會の會計、古老豊澤雷助師を失ひ、今また名人豊澤松太郎師の永眠誠に惜しき限りであります。茲に謹んで追悼の意を表します。

◆松太郎師は極めて無口で、先方から聴く時には何んでも教へられたが、自分から話したり、又多年に亘り繊細に斯道の蘊奥を究められたその造詣を發表するといふやうな事もなく、神の如きあの名藝は、師の長逝と共に永遠に葬むられて仕舞ました、返へすくも惜しい事でありませす。

◆九月の中旬迄に歸る豫定で八月佐渡へ渡りました處、病臥の爲め、永々の逗留となり、先日漸く歸宅致しました次第、本誌(第九拾九號)の大延刊は何んとも恐縮に堪えませぬ何卒御諒察賜り度偏にお願い申上ます。

芳河士

(行發日五廿回一月毎)

號九拾九第

定	一	部	金	三	十	錢	郵	稅	三	錢		
價	六	月	分	金	一	圓	八	十	錢	郵	稅	共
廣	一	年	分	金	三	圓	郵	稅	共			
告	通	一	頁	金	貳	拾	圓					
料	別	一	頁	金	參	拾	圓					
特	一	頁	金	參	拾	圓						

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増但三錢切手
の事

昭和十三年十月廿三日印刷納本
昭和十三年十月廿五日發 行

編輯兼 發行人 富 取 壽 鹿
東京市小石川區音羽丁目四

印刷人 栗 原 榮 松
東京市牛込區早稻田町五八

印刷所 栗 原 印 刷 所
電話牛込一四五一番

發行所 太 棹 社
東京市小石川區音羽丁目四
振替東京三一七八五番

